

芥川龍之介『蜜柑』論

——影響力の物語——

竹友美樹

一
『蜜柑』は、大正八年四月三日に脱稿され、大正八年五月一日発行の雑誌『新潮』第三十巻第五号に「私の出遇つた事」の総題で「一、蜜柑」「二、沼地」として掲載される。のち『影燈籠』『地獄變』『沙羅の花』『芥川龍之介集』に収められた。この特殊な発表のされ方は問題視され、芹澤光興氏の論文の中で指摘されている。また、作者である芥川龍之介が海軍機関学校を退職した後、初めて脱稿された作品である。

『蜜柑』は、小娘が汽車から三人の弟たちに向かって蜜柑を投げるといふ場面が大変印象的な作品である。先行研究では『蜜柑』は芥川の実体験であるとし、「私」と芥川本人を重ねて読む読みが多く見られる。そのためか、『蜜柑』の主題については、あまり明確に論じられることはない。「いささかも表現に無駄のない、作者の人間のな心持ちの温く染み出た作品である」という南部修太郎の^①評を始めとし、菊地弘氏の「人間味」「血縁」「ヒューマニズム」が主題だとする説と、芹澤光興氏や高橋龍夫氏の「芸術」が主題だとする説がある。

芥川の実生活、「私」と小娘の関係性や文章上の表現を通して、芥川が『蜜柑』において何を表現したかったのか、考察していきたい。

二

『蜜柑』の題名にもなっている蜜柑だが、なぜ小娘が弟たちに投げ与えるものが蜜柑でなければならなかったのだろうか。作者である芥川が実際にその光景を目撃し、そのまま書いたからだと考えれば簡単だが、もう少し蜜柑である必然性を考えてみたい。例えば、季節設定が冬だからという理由で蜜柑が登場するならば、他の果物でも成立するのではないだろうか。芥川の『葱』に次のような記述が見られる。

さうしてその町の右側に、一軒の小さな八百屋があつて、明く瓦斯の燃えた下に、大根、人参、漬け菜、葱、小蕪、慈姑、牛蒡、八つ頭、小松菜、獨活、蓮根、里芋、林檎、蜜柑の類が堆く店に積み上げてある。^②

『葱』は大正八年十二月に書かれた作品である。大正八年は「蜜柑」が書かれた年と同じ年に当たるといえる。『葱』の描写から、このころには林檎も蜜柑も一般に浸透し、八百屋に並ぶ果物であったということが分かる。さらに、この場面の季節は冬である。八百屋にある冬の果物の代表として林檎と蜜柑が挙げられていると考えられる。それならば、『蜜柑』においても小娘の投げる果物が蜜柑ではなく林檎であったとしても不思議ではない。他にも果物は多くあるが、ここでは林檎を比較対照として考えてみたい。

蜜柑の名は室町時代から見られるが、これはコミカン（紀州蜜柑）のことだとされる。現在、蜜柑として一般に親しまれているのは温州蜜柑である。これは江戸時代の初期に発生したもので、一般に広まったのは明治初期以後のことだとされている。明治時代に主流が紀州蜜柑から温州蜜柑に変わったとされる。旬の時期は九月から一月で、季語は冬である。

一方、林檎の名は平安時代から見られるが、これはワリンゴのことで、セイヨウリンゴとは異なる。「林檎」はワリンゴを指し、セイヨウリンゴはワリンゴと区別するために「苹果」と表記していた。現在、一般的に林檎と呼ばれるものはセイヨウリンゴのことで、江戸末期に日本へ渡来し、明治時代に入って本格的な導入が行われたとされる。旬の時期は九月から十二月で、季語は秋である。

つまり、蜜柑も林檎も明治時代には一般的に広まっていた果物だと言える。夏目漱石『三四郎』の中に林檎と蜜柑、その他多くの果物の描写が登場すると塚谷裕一氏が指摘している。

そもそも日本で果物から珍奇なもの、高級なもの、という意識を捨て、日常の食生活に取り入れてゆくようにと唱えられだしたのは、諸外国との交流も深まってきた明治四〇（一九〇七）年頃からであるという。明治四一（一九〇八）年に発表された『三四郎』の果物は、それを受けて積極的に書き込まれたものなかもしれない。

理由は何にせよ、『三四郎』は果物が小説に登場したきわめて初期の例なのである。⁵⁾

『三四郎』の中で、蜜柑と林檎の登場する場面は次の通りである。

「医者は昨夕来ました。インフルエンザださうです」

「今朝早く佐々木さんが御出になつて、小川が病気だから見舞に行つて遣つて下さい。何病だかわからないが、何でも軽くはない様だ。つて仰やるものだから、私も美禰子さんも吃驚したの」

与次郎が又少し法螺を吹いた。悪く云へば、よし子を釣り出した様なものである。三四郎は人が好いから、気の毒でならない。「どうも難有う」と云つて寐てゐる。よし子は風呂敷包の中から、蜜柑の籃を出した。

〔中略〕

「蜜柑を剥いて上げませうか」

女は青い葉の間から、果物を取り出した。渴いた人は、香に迸る甘い露を、したゝかに飲んだ。⁶⁾

「なに、女だつて、君なんぞの會て近寄つた事のない種類の女だよ。それをね、長崎へ黴菌の試験に出張するから当分駄目だつて断つちまつた。所が其女が林檎を持つて停車場まで送りに行くと云ひ出したんで、僕は弱つたね」

三四郎は益驚いた。驚ろきながら聞いた。

「それで、何うした」

「何うしたか知らない。林檎を持つて、停車場に待つてゐたんだらう」

蜜柑は病氣の見舞いの品、林檎は見送りの品として使われている。この時代ではまだ、蜜柑も林檎も高級品であり、「蜜柑は林檎と同様急速に普及し始めてはいたが、何分目新しい果物であつたため、漱石の作品では贈答品の域を出ることがなかつた」と塚谷氏は述べている。漱石の作中では蜜柑と林檎は贈答品であつたが、芥川の作品の中ではもつと身近なものとして描かれている。芥川の『現代十作家の生活振り』のなかにも蜜柑についての記述が見られる。

果物は可なり好きだが、それも酸味のないものが多い。例へば、柿、干葡萄、龍眼肉、バナナなど。特に無花果はこれ等好物の随一である。それとは反対に酸味を持つものは嫌ひで、特に蜜柑などその筆頭である。

ここでは、嫌いな果物として蜜柑が挙げられている。林檎に関しては次のような話がある。

主人は普段、めつたに私どもに土産など買って来たことはありませんでした。

それでも伯母には、本当によく気がついて土産を買つてかえりました。

銀座あたりからでも、ちよいとそこいらへ出た時でも、インヴァネスの袖の中から、右に二つ、左に三つと、しかも上等の大きな林檎を買つて来ました。

伯母はその上等の林檎が特に好物でもありません。

「ばあちゃん」と言いながら、一つまた一つと袂から出して鉢のふちや、食卓の上にならべました。

伯母はそんな時たいへん良い機嫌で、ならべられる大きな林檎をあかず眺めておりました。

伯母のことを大切に思つていた芥川は伯母の好きな「上等の林檎」をよく買つてきたと、芥川の妻である芥川文が後に語っている。

このように、蜜柑と林檎は芥川の実生活においても身近な果物であつたことが分かる。

田島俊郎氏は「私」は蜜柑を投げる小娘に、マリアつまり聖霊の訪れを感じていたのである」と述べている。小娘はマリアの象徴であるとする田島氏の説を支持するならば、『蜜柑』は一種のキリストン物として読むことができる。芥川にはキリストン物と呼ばれる作品がある。芥川がキリスト教を信仰していたという事実はないが、キリスト教に興味を持っていたことは確かである。

『旧約聖書』の創世記に禁断の果実というものが登場する。禁断の果実はエデンの園にあつた知恵の木の実で、神から食べることを

禁じられていた。しかし、アダムとイブの二人の男女が蛇に誘惑されて実を食べ、楽園から追放されたという内容である。この禁断の果実が何であるかは明記されていないが、イチジクあるいは林檎であったという説が今では一般的である。宗教学にもしばしば林檎が禁断の果実として描かれている。キリシタン物を意識したのであれば、蜜柑ではなく林檎の方がキリスト教との結びつきは直接的であるように思える。しかし、本当にキリシタン物として描いたのであれば、マリアの象徴である小娘が投げるものが林檎であってはならない。林檎は禁断の果実であり、神が食べることを禁じた果物であるからだ。しかし、これでは林檎を投げない説明にはなっても、小娘が蜜柑を投げる必然性を説明したことにはならない。

林檎や他の果物ではなく、蜜柑でなければならなかった理由は『蜜柑』が「曇った冬の日暮」に登場するからだと考ええる。「心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑」とあるように、「曇った冬の日暮」の中に夕日の代わりとして蜜柑が表れたのではないだろうか。色だけで考えるのならば、柿や枇杷も橙色をしている。柿も枇杷も蜜柑に比べて日本に古くからあり、馴染みのある果物である。しかし、柿は秋の果物、枇杷は初夏の果物であるため「冬の日暮」に登場するにはふさわしくない。

冬の長門峡

長門峡に、水は流れてありにけり。

寒い寒い日なりき。

われは料亭にありぬ。
酒酌みてありぬ。

われのほか別に、
客とてもなかりけり。

水は、恰も魂あるものの如く、
流れ流れてありにけり。

やがても蜜柑の如き夕陽、
欄干にこぼれたり。

あゝ！——そのやうな時もありき、
寒い寒い 日なりき。

また、詩人中原中也は『冬の長門峡』で「蜜柑の如き夕陽」という表現をしている。蜜柑と夕日を結び付ける表現は他の作品でも見られる。『蜜柑』においても、蜜柑が夕日、又は太陽の役割を果たしていると考ええる。

「曇った冬の夕暮」をはじめ、描かれる景色は「疲労と倦怠」「不可解な、下等な、屈辱な人生」を感じている「私」の心を反映したものであると考えられる。そのなかに小娘が放った蜜柑は太陽のようには私の心を照らす存在として描かれているのではないだろうか。

『蜜柑』を分析してみると色彩の描写が多く登場することが分かる。また、つかの間の明るいスケッチという評価もある。しかし、スケッチというにはあまりにも緻密に計算された作品であると感じる。スケッチと言うよりも完成された絵画のような趣がある。また、色彩は小娘に集中し、小娘を鮮やかに描き出している。一方で、「私」に関して色彩の描写はない。芥川は意識的に色彩の描写を使い、『蜜柑』を絵画のように描こうとしたのだと私は考える。

まず、芥川が絵画や色彩についてどのように考えていたかを考察していきたい。芥川は『文芸的な、余りに文芸的な』において次のように述べている。

デッサンのない画は成り立たない。(カンディンスキイの「興」などと題する数枚の画は例外である。)しかしデッサンよりも色彩に生命を託した画は成り立ってゐる。幸ひにも日本へ渡ってきた何枚かのセザンヌの画は明らかにこの事実を証明するのであらう。僕はかう云ふ画に近い小説に興味を持つてゐるのである。¹³

「デッサンよりも色彩に生命を託した画」「僕はかう云ふ画に近い小説に興味を持つてゐるのである」とあることから、芥川が少なからず色彩や画を意識して小説を書いていたということが分かる。

さらに芥川は俳句にも通じ、我鬼という俳号を持っていた。俳句の作品も多く残っている。俳句を書いていた芥川はひとつひとつの

言葉から想起される情景を大切にしていたと想像できる。また、芥川の俳句には、色彩を意識したものが見られる。例えば「青蛙のれもペンキぬりたてか¹⁴」や「風すぢの雨にも透る青田かな¹⁵」など、句から情景が色彩を伴って鮮やかに浮かび上がってくる。中村草田男氏も次のような見解を述べている。

趣味的な作品感の強い点、視覚的な鮮明さと鋭さに充ちてゐる点、得意な事物に対する嗜好の閃いてゐる点、しかもそれ等全部の要素の力が究極に於て、言葉の幹旋、活躍に集注されてゐること、さういふ彼の芸の特質がはやくもここに全貌を現はしてゐることに注意せざるを得ない。¹⁶

中村氏がいう芥川の俳句に見られる要素が小説、ここでは特に『蜜柑』に含まれていたとしても不思議ではない。先ほど引用した『文芸的な、余りに文芸的な』の同一部分を引用し、高橋龍夫氏も次のように述べている。

詩や短歌、俳句のように、その一瞬の情感や風景を自らの精神との交響を介して「画に近い小説」に仕立て上げること、彼の創作意識の一端があつたことは間違いない。¹⁷

続いて、色彩の表現について考察していきたい。

小娘は多くの色彩を持つ。彩度は高く、暖色系の色が多い。小娘に関して、明確に色彩が示されるのは「横なでの痕のある鞆だらけの両頬を気持の悪い程赤く火照らせた」「三等の赤切符」「垢じみた

萌黄色の毛糸の襟巻」「あの鞆だらけの頬は愈赤くなって」「心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑」「鮮やかな蜜柑の色」の六箇所である。

なお、「二等の赤切符」の赤切符は赤と言っているものの、実際には真っ赤ではなく、薄い赤、ピンク、橙色に近い色をしている。また、「垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻き」の萌黄色は「黄と青との中間色。やや黄色がかった緑色。萌葱色。また、織物の色で萌葱色のもの」¹⁸⁾である。

「心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑」「鮮やかな蜜柑の色」については、明確に何色かは分からない。「トロッコ」にも蜜柑が出てくるが、「両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも目を受けてゐる」¹⁹⁾と描写されている。「トロッコ」の蜜柑は「黄色い実」とされ、色彩が明確である。一方、「蜜柑」では「暖かな日の色」「蜜柑の色」とあることから、橙色であるだろうが、詳細は読者の想像に委ねられている。

また、色彩を連想させる描写として「霜焼けの手」がある。小娘が霜焼けであると見て分かったのなら、小娘の手は赤かったと推測できる。

風景について明確に色彩が示される描写は「煤を溶かしたやうなどす黒い空気」「一旒のうす白い旗」がある。小娘の持つ色彩とは違い、白と黒しか示されない。

また、色彩を連想させる描写は「曇つた冬の日暮」「薄暗いブラツトフォオム」「雪曇りの空」「どんよりした影」「暮色」「枯草」「煙」「闇」「みすばらしい藁屋根や瓦屋根」「曇天」である。全体的に彩度と明度が低い印象を受け、暗い世界が描かれていることが分かる。

冒頭の「曇つた冬の日暮」という描写が、作品全体に薄暗い灰色や黒のイメージをつきまとわせる。芥川龍之介の作品に、日暮れからはじまるものがいくつもあると指摘した平岡敏夫氏は「薄暮」の意識はけっして朝や白昼に至りつくものでなく、〈夜〉に向かうべきものでしかないのである。²⁰⁾と述べている。「羅生門」で老婆の着物を剥ぎ取った下人が、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りる描写や「トロッコ」で良平が夜になる前に必死に家に帰る描写があるように、夜は悪や闇、不安の象徴として描かれている。さらに平岡氏は次のように述べている。

「蜜柑」もまた〈日暮れからはじまる物語〉であるが、さきにもふれたように、〈冬の夕暮〉というのが、一見「杜子春」とはかわりのない「憂鬱」をみちびき出しているようだ。²¹⁾

「春の日暮」から始まる「杜子春」と「曇つた冬の日暮」から始まる「蜜柑」では、同じ夕方の時間帯でも「蜜柑」の方がより暗い印象を読者に与える。

また、「暮色」という言葉は「暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹」「一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺つていた」「暮色を帯びた町はづれの踏切り」の三箇所に出てくる。その中の「暮色を揺つてゐた。」という部分は初出の際に「薄暮を揺つてゐた。」という表現であった。「薄暮」を「暮色」と変更していることから「暮色」を強調していることが分かる。細かい変更ではあるが、芥川は俳人でもあった。そのことを考えると、この変更を無視することはできないだろう。暮色には「夕暮れの薄暗い色合い。暮れかかったよう

す」という意味がある。「暮色」を強調していることから、芥川が色彩を意識していたと考える。

風景描写は絵画でいうところの背景であると考えられる。小娘が強調されるよう、風景描写は彩度と明度の低い色が配置されているのではないだろうか。芹澤光興氏は「蜜柑」の色彩について次のように述べている。

〈暮色〉——〈鮮な蜜柑〉という色彩の対照を配置しているためであろう、この場面は動いている汽車から見た情景であるにもかかわらず、すぐれて静謐な、絵画的印象を喚起する。²³⁾

「暮色」——〈鮮な蜜柑〉の対照的な色の配置によって、「絵画的印象」を喚起するとしているが、対照的な色の配置による「絵画的印象」は作品全体を通して見られると考える。

また、小娘の弟だと考えられる三人の男の子は、小娘と同じように頬は赤いが、「この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた」とあり、ほとんど風景に溶け込んでいると考えてよいだろう。

小娘、風景、三人の男の子の色彩をここまで見てきたが、「私」に関して、色彩の表現は登場しない。「色」という文字さえも見られない。「私」は色彩を持たず、透明である。風景に溶け込んでいるか、情景を切り取るカメラの役割しか与えられていないと考ええる。「私」は小娘を常に意識しているが、小娘が「私」を意識した様子は無い。まるで「私」が透明人間であるかのように見える。しかし、「私」自身には色彩が見られないが、情景を語るのには「私」

である。語られる情景の色彩は「私」の心を表していると考えられる。また、高橋龍夫氏は次のように述べている。

一枚の絵の背景を何らかの色彩で覆うのに似て、「私」の「不可解な、下等な、退屈な人生」そのものが作品の「トーン」を響かせ、「私」の「云ひやうのない疲労と倦怠」は心理的色彩のディテールとして演出している。²⁴⁾

背景に暗い色を統一して配置することによって、「私」の心象世界が表現されていると言えるだろう。彩度の低い暗い世界の中で、色彩を持った小娘は「私」に「ある得体の知れない朗な心もち」を湧き上がらせる。色彩を持たない「私」と対照的に、「私」を變える存在として、小娘は色彩を持っていたのではないだろうか。この作品において色彩は「私」の心情を表し、『蜜柑』を絵画的に描くための役割を担っていると考える。

四

ここまで、蜜柑であることの必然性と蜜柑における色彩について述べてきたが、私は『蜜柑』の主題は影響力であると考える。ここでのいう影響力とは、自分の外に働きかけ、変化をもたらす力である。『蜜柑』は芥川の実体験をもとにした作品だと言われている。それが本当ならば、その体験に影響を受けて書いた物語であるといえる。

物語の中では、小娘から「私」への影響力、小娘から三人の弟た

ちへの影響力、三人の弟たちから小娘への影響力が働く。小娘は蜜柑を投げることで弟たちに影響を与え、弟たちは喊声を上げること
で小娘に影響を与える。小娘が持つ強い影響力、小娘と弟たちのやり取りにより、私の内面も変化する。一方で、私だけが影響力を持たず、受け身の態度を貫いている。自分から小娘に働きかけるわけでもなく、何かを変えようとするわけでもない。小娘に対して、自分自身に対しても、第三者としての立場を貫く。

本論文の「二」でも述べたように、「私」は色を持たず、小娘だけが多くの色を持っている。これも小娘が持つ影響力を表現していると考えられる。小娘が投げた蜜柑の色は、「私」の心に焼き付けられ、「私」に影響を与える。その一方で、色を持たない透明な「私」は小娘に影響を与えることができず、認知されることさえない。登場人物たちが持つ色の彩度や明度、色の種類がそのまま、その人物が持つ影響力の強さを表していると考えられる。

芥川の実生活においても『蜜柑』は、海軍機関学校の影響下から逃れることに成功し、作家として読者に影響力を持つ位置にいた時期の作品であるといえる。

横須賀発の列車が出発するとき、『蜜柑』の「私」は心の寛ぎを感じる。それは、横須賀という地から離れることができるという安堵と喜びだったのでないだろうか。芥川が勤務していた海軍機関学校も横須賀にあり、横須賀は軍の影響を強く受ける場所であった。「私」も芥川も横須賀、海軍機関学校の影響下から逃れることを望み、成功していると言える。

『蜜柑』は、芥川が海軍機関学校を辞めた後で初めて脱稿した作品である。言い換えれば、作家として生きていく覚悟を決め、それ

が現実となった時の第一作目の作品である。

芥川は昭和二年七月二十四日に自殺してしまう。自殺の動機は「僕の将来に対する唯ほんやりした不安」だと「或旧友へ送る手記」に書き残している。その時、枕元には聖書が置かれていた。聖書はキリスト教の経典であると同時に、世界中の人々に広く読まれ、影響を与え続けている作品だ。いわば大ベストセラーであるという見方もできる。芥川はキリスト教の信者ではない。キリスト教において自殺はタブーである。芥川にとって聖書はキリスト教の経典ではなく、文学作品としての憧れの存在だったのではないかと私は考える。聖書のように多くの人に長く読まれ、影響を与える作品を作る、ことこそが芥川の願いだっただけではないだろうか。

芥川は影響力を持たない「私」から脱し、影響力を持つ小娘のような存在になること望んでいたのだと私は考える。『蜜柑』は影響力にまつわる物語であると言える。

【注】

(1) 南部修太郎「きりしとほろ上人伝」「蜜柑」「沼地」評『舞踏会・蜜柑』芥川龍之介 昭和四十三年十月三十日 角川書店

(2) 菊地弘「芥川龍之介『蜜柑』」関口安義編『芥川龍之介作品論集成第五巻 蜘蛛の糸』翰林書房 平成十一年七月二十八日

(3) 芹澤光興「『蜜柑』論への一視角——或得体の知れない朗心もち」をめぐって——関口安義編『芥川龍之介作品論集

- 成第五卷 蜘蛛の糸 翰林書房 平成十一年七月二十八日
 高橋龍夫「蜜柑」における手法 — 「私」の存在の意味 —
 関口安義編『芥川龍之介作品論集成第五卷 蜘蛛の糸』翰林書房 平成十一年七月二十八日
- (4) 芥川龍之介「葱」『芥川龍之介全集 第三卷』昭和五十二年十月二十四日 岩波書店 三五一頁
- (5) 塚本裕一『果物の文学誌』平成七年十月二十五日 朝日新聞社 二〇頁
- (6) 夏目漱石「三四郎」『漱石全集 第五卷』平成六年四月十一日 岩波書店 五九九〜六〇〇頁
- (7) (6) に同じ 五九五頁
- (8) (5) に同じ 二四頁
- (9) 芥川龍之介「現代十作家の生活振り」『芥川龍之介全集 第十二卷』平成八年十月八日 岩波書店 七八頁
- (10) 芥川文「追想 芥川龍之介」昭和五十年二月十五日 筑摩書房 六八頁
- (11) 田島俊郎「なぜ蜜柑は「空から降って来た」のか―芥川龍之介「蜜柑」を読む」八八頁
- (12) 中原中也「冬の長門峡」『新編 中原中也全集 第一巻 詩 I 本文篇』平成十二年三月二十五日 角川書店 二七一頁
- (13) 芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」『芥川龍之介全集 第九巻』昭和五十三年四月二十四日 岩波書店 四頁
- (14) 芥川龍之介「我鬼句抄」『芥川龍之介全集 第六巻』昭和四十四年一月二十日 筑摩書房 一三三頁
- (15) (14) に同じ
- (16) 中村草田男「俳人としての芥川龍之介」吉田精一『芥川龍之介全集別巻』昭和四十六年十一月五日 筑摩書房 二〇〇頁
- (17) 高橋龍夫「蜜柑」における手法 — 「私」の存在の意味 —
 関口安義編『芥川龍之介作品論集成第五巻 蜘蛛の糸』平成十一年七月二十八日 翰林書房 一八三頁
- (18) 日本国語大辞典「もえ・ぎ」【葫葱・葫黄・葫木】
 JapanKnowledge. <http://japanknowledge.com.egate2lib.yamaguchi-u.ac.jp> (最終参照 2018-01-05)
- (19) 芥川龍之介「トロッコ」『現代日本文学大系四十三 芥川龍之介集』昭和四十三年八月二十五日 筑摩書房 一八七頁
- (20) 平岡敏夫「芥川龍之介」『日暮れからはじまる物語―「蜜柑」・「杜子春」を中心に―』昭和五十七年十一月二十五日 大修館書店 七二頁
- (21) (20) に同じ 六八頁
- (22) デジタル大辞泉「ぼ・しょく【暮色】」
 JapanKnowledge. <http://japanknowledge.com.egate2lib.yamaguchi-u.ac.jp> (最終参照 2018-01-05)
- (23) 芹澤光興「蜜柑」論への一視角 — 〈或得体の知れない朗 な心もち〉をめぐって — 関口安義編『芥川龍之介作品論集成第五巻 蜘蛛の糸』翰林書房 平成十一年七月二十八日 翰林書房 一七五頁
- (24) 高橋龍夫「蜜柑」における手法 — 「私」の存在の意味 —
 関口安義編『芥川龍之介作品論集成第五巻 蜘蛛の糸』平成十一年七月二十八日 翰林書房 一八八頁
- (25) 芥川龍之介「或旧友へ送る手記」『芥川龍之介 第九巻』昭和

五十三年四月二十四日 岩波書店 二七五頁

(たけとも・みき)